

### 【3歳児 5月の事例】

したいことや思い通りにならないことを保育者に分かってもらって安心して遊ぶ  
「保育者を見て『シュッ、シュー』」

① 自分の近くに木製電車をたくさん置きながら電車を走らせていたA児。近くで同じように電車を走らせていたB児が、A児の足元にあった電車を一つさっと取った。

② A児は、B児が持っている電車を取り返そうと、つかんで引っ張った。B児は「だめ、やめて」、A児は「やめて、返して」と言い合っているうちに、二人とも大きな声で泣き始めた。



③ 保育者は、二人のそばに駆け寄り、手を握ったり背中をさすったりしながら「Aちゃんは、電車を取られて嫌だったんだね」「Bちゃんは、もっと電車が欲しかったんだね」と言って気持ちが落ち着くのを待った。そして、二人の顔を交互に見つめながら、「AちゃんもBちゃんも電車が大好きだから、いっぱい遊びたかったんだよね」と話し、「Bちゃん、電車が欲しい時は、『貸して』って言うといいんだよ」と伝えた。

④ 保育者は、「先生も電車好きなんだよ」と言いながら、A児とB児との前に積み木でトンネルと駅を作った。そして、保育者が「ガタンゴトン、ピーッ」と言いながら、電車を走らせたり、「A君駅です。B君駅です」「止まります。シュッ、シュー」と声を出したりして遊んだ。



⑤ 二人は、しばらく保育者の遊ぶ姿を見た後、「シュッ、シュー」と声を出してそれぞれが持っていた電車で遊び始めたので、保育者は、その様子を見守った。

幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

#### 【興味・関心】

①自分の大好きな電車遊びを楽しんでいた。

#### 【自己主張】

②自分の気持ちを「だめ、やめて」「やめて、返して」と言葉で表現した。

#### 【保育者への信頼】

③④保育者に分かってもらえたと感じ、自分の気持ちを落ち着かせていった。

#### 【安心感、満足感】

⑤保育者の近くで自分のしたい遊びをした。

### 学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

### 環境の構成のポイント

「気に入った遊具で遊べるようにしましょう」

- 入園当初は、家庭的な雰囲気を感じながら徐々に園に慣れるように、家庭で遊んでいる好きな遊具を保護者に尋ねて用意します。
- どの幼児も欲しいものは手に持つことができるように数を多めに用意します。

### 保育者の関わりのポイント

「幼児の気持ちを受け止めたり、遊び心を発揮したりしましょう」

- 思い通りにいかなくて、悲しくなったり寂しさを感じたりしている幼児には、気持ちを察して、言葉をかけたり、手を握ったり抱きしめたりして、心を包み込むような温かい関わりをすることが大切です。



- 自分の思いを言葉で伝えられない幼児には、保育者が代わりに言葉にして伝え、伝え方の見本を示します。
- 一緒に遊びながら、保育者も遊び心を発揮して、おもちゃや動物などになりきった言動をしたり、擬音を使ったりして遊びのイメージを膨らませ、幼児の遊びを楽しくしていきます。

### 家庭での関わりのポイント

「幼児が園生活に慣れるよう、言葉にならない感情に気付いたり、家庭での様子を園に伝えたりしましょう」

- 少しずつ園生活に慣れてきますが、自分の気持ちを言葉で伝えるのがもどかしく泣いたりたたいたりすることがあります。言葉にならない感情に気づき、幼児のつぶやきや話をしっかりと聞いてあげてください。
- 幼児たちは、初めての集団生活による戸惑いから、緊張したり、我慢したりして過ごしているかもしれません。夜泣きや爪かみ等日頃と違う様子がある時は、園の保育者に伝えてください。保育者が家庭の様子を知ることで、幼児理解を深めることができ、一人一人の幼児に対して適切な関わりができるようになり、幼児の安心感につながります。



学びに向かう力を育むための手立て

### 【3歳児 7月の事例】

## おもしろそうと興味をもったことを遊びにしてい

「影がいっぱいで、楽しいね」

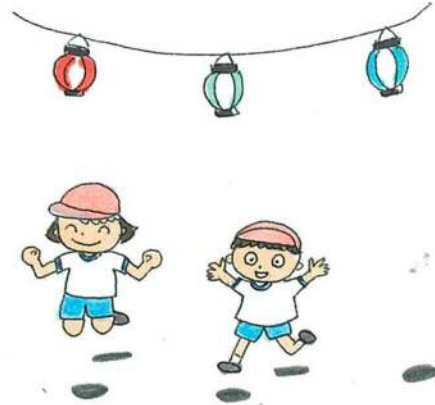
① 明日は、園の夏まつり。朝から保育者たちは、園庭の上にロープを何本も張り、カラフルなちょうちんをたくさんつるした。1階の保育室からその様子を見上げていたA児とB児は「きれいだね」「すごいね」とつぶやいた。

しばらくして、園庭に遊びに出てきたA児は「あっ、まるがいっぱい」と声をあげた。地面にくっきりとできたちょうちんの影を見つけて、A児は両足で影を踏み遊び始めた。

② 保育者が「先生もやっていいかな」と声をかけると、A児は「いいよ」と答えた。それを見ていたB児とC児も近づいてきて、A児に続いてピョンピョン、ピョンピョンと丸い影の上を次々に跳んで遊んだ。保育者はA児たちと一緒に丸い影を踏み時に「1・2・3・・・」と数えた。

③ すると、A児、B児も数えながら影踏みをした。

保育者が、「あっ、あっちにもちょうちんの影があるね」と言うと、C児は「ぼく、あっちも跳んでくる。先生も数えて」と保育者の手をとってかけ出し、数を数えながら影踏みをして遊んだ。影を踏みながらA児は「影がいっぱいで、楽しいね」と言った。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

#### 【自然現象への関心】

①園庭のちょうちんの丸い影に興味をもち、影踏みをして遊んだ。

#### 【好奇心】

②友達のしていることを面白そうに思い、保育者や友達と一緒に同じように遊んだ。

#### 【数量・図形への関心】

③保育者と一緒に、丸いちょうちんの影を数えて、いっぱいあることを楽しんだ。

#### 【親しみ、安心感】

③保育者の手をとってかけ出し、数を数えながら影踏みをして遊んだ。

### 学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

## 学びに向かう力を育むための手立て

### 環境の構成のポイント

「幼児の心を動かす、いつもと違う環境も大切にしましょう」

- いつもと違う環境は、何だろう、面白そう、と幼児の心をわくわくさせます。そして、幼児は、その環境を今まで経験した遊びの中に取り込んで遊ぼうとします。

保育の中には、幼児が大好きな遊具で思う存分遊び安心できる環境と共に、「いつもと違う、何だろう?」「面白そう」と幼児の心を動かす環境も大切です。



### 保育者の関わりのポイント

「幼児が自然現象と関わる機会を逃さないように、遊びに取り込んでいくようにしましょう」

- 偶然できた影、水たまりや氷、風、雲、虹や雪など幼児の身近なところには、様々な自然現象があります。保育の現場で、それらに出合う経験は幼児の心に豊かな感性や好奇心を育みます。幼児がそれらに気付き、遊びに取り込んでいくよう、保育者自身が感動したり幼児の気付きに共感したりします。時には、遊びを中断して、虹や雪、雲などに気付かせて関わらせていくことも大切です。

### 家庭での関わりのポイント

「何気ない遊びの中で、幼児は多くのことを学んでいます。そのことを見守っていきましょう」



- 何気ない影踏み遊びですが、この中で、面白そうと感じて遊び出す意欲や、リズムカルに体を動かすことや、数を数えようと興味をもつことなど多くのことを学び取っています。
- 自分から面白そうと思って遊び始めたことは些細なことでも、幼児が生み出した大切な遊びです。幼児が面白いと感じていることに共感し、一緒に遊んだり見守ったりしましょう。大人の支えが、幼児の物事に粘り強く取り組む力を育てます。

### 【3歳児 11月の事例】

## 〇〇のつもりになって、大好きな保育者と遊ぼうとする

「おれは悟空だ。わになんかやっつけてやる」

① つるつる山からA児とB児が「先生こっちこっち」と声を掛けた。保育者が近づくとA児は「捕まらないよ」と言うので、保育者は「パクパクわにだよ。食べちゃうよ」と保育者もわになりきって捕まえようとした。すると、A児は「こっちだよ。食べてみろ」B児は「食べちゃいやだ」と言った。

砂場にいたC児は、保育者を見て「これは、わにさんの御飯だよ。食べてね」と、どんぐりをつるつる山の周りにまいた。保育者が「わあ、おいしそう。もりもり食べて力を出しちゃうよ」と言ってどんぐりを食べるまねをすると、A児も山から降りてきて「僕だってご飯食べて力つけるもん」とどんぐりを食べるまねをした。

② D児が近づいてきてしばらく様子を見ていた。すると、「おれは悟空だ。わになんかやっつけてやる」と、わにと戦うつもりで、保育者の背中をたたいた。保育者は「わには強いから悟空も食べちゃうよ。がおお」とD児を捕まえるまねをした。D児は「悟空は強いんだ」と保育者と戦うつもりで、保育者に向かって行った。

③ 保育者は、「う、やられた。Dちゃん、Aちゃんたちを助けに来てくれたんだね」と言うと、D児は少しうれしそうな表情になった。保育者が「DちゃんもAちゃんたちと一緒に遊ぶ？」と声を掛けた。D児は「うん」と言い、つるつる山に登り始めた。保育者は「みんなを、食べちゃうよ」と言って遊びを続けた。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

#### 【親しみ】

①大好きな保育者を遊びに誘って、イメージをもってやりとりを楽しんだ。

#### 【親しみ・思いやり】

①保育者にご飯を渡して、大好きな気持ちを表した。

#### 【好奇心、信頼感】

②自分なりの方法で保育者のいる遊びに参加しようとした。

#### 【安心感、満足感】

③悟空になったつもり言葉を保育者に受け入れてもらって、友達と一緒に楽しんだ。

### 学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

## 学びに向かう力を育むための手立て

### 環境の構成のポイント

「保育者が〇〇のつもりになりきって遊んだり、楽しくなる遊具を用意したりしましょう」

- 3歳のこの時期、保育者がいれば友達と一緒に遊ぼうとする幼児も増えてきます。〇〇のつもりになって楽しそうに遊ぶ保育者の姿が大切です。
- 幼児の「〇〇のつもり」を楽しくする素材や遊具、遊びの場などを用意することも大切です。



### 保育者の関わりのポイント

「『先生、〇〇して遊ぼう』という言葉を受け止め、一人一人の“〇〇のつもり”に応じましょう」



- 幼児は保育者が大好きになり、一緒にいると楽しい、してほしいことをかなえてくれるという思いで保育者を求めています。幼児の「〇〇のつもり」を分かって動いたり言葉にしたりして幼児が「〇〇のつもり」で楽しく遊ぶことができるようにします。
- 幼児は、行動で自分の思いを表現することがあります。保育者は、その思いをくみ取って言葉にして周りの友達にも伝わるようにしていきます。

### 家庭での関わりのポイント

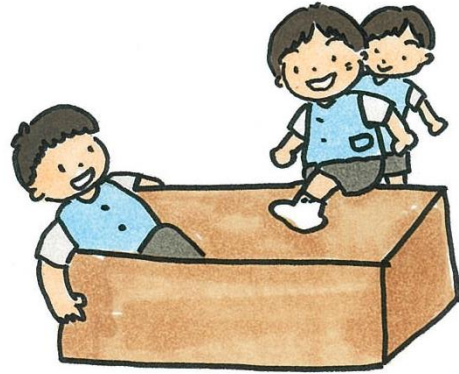
「〇〇のつもりの世界に、付き合いましょう」

- 家庭でも、ヒーローやお姫様になって遊ぶ姿が見られると思います。なりきっている気持ちに応答して「お姫様、そろそろお風呂に入りましょう」など、一緒に楽しんでください。
- 時には、戦いのつもりでパンチやキックをすることもあります。まだ加減をすることが分からないので「今は痛かったよ。もう少し優しくしてね」と伝えるようにしてください。

## 【4歳児 11月の事例】

### 遊びの場が壊れても、保育者に支えられて気持ちを調整する 「お湯、いっぱい入れて、みんなで入ろう」

- ① A児が保育室の段ボールを見つけた。「先生、段ボール使っていい」と聞いて段ボールの周りに積み木を並べて中に入って遊んでいた。保育者が「お風呂みたいだね」と言葉を掛けるとA児は「温泉だよ、そこから入るんだよ」と指さした。それを見ていたB児、C児が「入れて」と言ってやってきた。
- ② A児は「いいよ」と答えたが、段ボールの中でB児とC児がはしゃいだため、段ボールは壊れてしまった。A児は、「あああっ」と声をあげ、そのままじっと押し黙ってしまった。保育者がA児に「大事な温泉が壊れてしまったね。A君は静かに入りたかったんだね」と言葉を掛けるとA児は、こくんとうなずいた。3人はしばらく黙っていた。保育者は段ボールが壊れ、戸惑っているB児、C児に「温泉には手や足を思い切り伸ばして楽しく入りたかったんだね」と声を掛けた。B児、C児は、こくんとうなずいた。
- ③ しばらくして、B児が「もっと大きな段ボールがあるといいな」と言ったので、保育者は「そうだね、そうしたらA君もB君もC君も楽しいね」と応えた。B児は「僕、お母さんに話して探してくる」と言うと、C児は「僕も」と言った。
- ④ 翌日、段ボールが数個集まった。B児は「大きくないけど、たくさんつなげれば何人入ってもいいね」と言った。保育者は「ほんとだね。たくさん温泉がくっついているところみたいだね。A君、これなら壊れないね」と言うと、A児は笑顔になり「うん、あとはお湯だね。お湯はこれにしよう」と水色のタフロープを切って入れた。A児は「お湯、いっぱい入れて、みんなで入ろう」と言うと、C児や周りの幼児も集まってたっぷりのお湯を入れ、温泉遊びを楽しんだ。



#### 幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

#### 【興味・関心、意欲】

①段ボールを使って自分でイメージしたこと  
で遊ぼうとした。

#### 【安心感】

②段ボールが壊れたことにショックを受けたが、保育者に気持ちを分かってもらって安堵した。

#### 【折り合い】

③遊び場を壊してしま  
ったが、どうすれば遊  
びを続けられるか考  
えることができた。

#### 【意欲、満足感】

④より楽しく遊ぶこと  
ができるようにアイ  
ディアを出して場を  
作り変え、みんなでイ  
メージを共有し、楽  
しく温泉遊びをした。

#### 学びに向かう力

自分の気持ちを  
調整する力

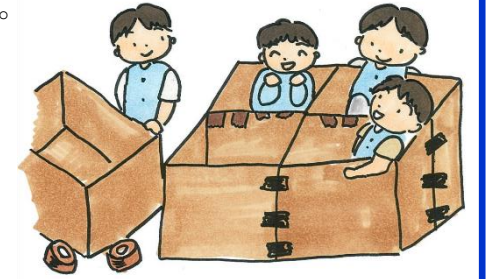
粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

#### 環境の構成のポイント

##### 「友達同士が同じ場で同じように遊べるようにしましょう」

- 4歳児は、仲の良い友達ができ、何でも同じようにしたくなる時期です。同じものを持ちたがり、同じように動かたがり、同じような格好で遊びたがります。そのような時は、遊具の数や種類に気を配り、同じ物を持っていないために疎外感を感じたり、仲間外れになったりすることがないようにしましょう。
- いろいろな友達と同じ場で過ごすことが、遊びの面白さを感じるためには必要になります。友達の発想に触れて、互いに影響し合いながら遊ぶ面白さは何物にも代えがたいものです。幼児たちが気持ちよく安定して遊ぶことができるように遊びの場の広さを考え、扱いやすい材料や用具を準備しておきましょう。



#### 保育者の関わりのポイント

##### 「互いの思いを伝えてイメージや気持ちを分かり合えるようにしましょう」

- 4歳のこの時期の幼児は、同じ場で同じように遊んでいても、それぞれにしたいことやイメージが違います。保育者が一人一人のイメージを捉え、仲立ちをしていくことで楽しく遊ぶことができます。
- 楽しそうだと思うと相手のことを考えずに行動することはよくあります。そのため、険悪なムードになることもあります。互いの違いに気づき、納得し合う経験のできる良いチャンスと捉えて保育者は丁寧かつ穏やかに関わしましょう。
- 幼児は、受け入れてくれる大人がそばにいるとき、安心して自分の気持ちを言葉や行動で表します。そして、相手に対して寛容な気持ちを表したり、多少の我慢をしたりして、自分と考え方に違いはあっても受け入れることができるようになっていきます。



#### 家庭での関わりのポイント

##### 「うまく伝えられない幼児の気持ちを言葉に置き換えましょう」

- 幼児期には自分が楽しみたいという思いが強く出過ぎてしまい、友達の気持ちを傷つけてしまうことがあります。悪気はないのですが、幼児なりのプライドも出てきて、一たびいざこざになると、素直には引き下がれない気持ちが強い場合があります。
- 大人が間に入ってどちらかを身びいきすることなく、穏やかに幼児の気持ちを「〇〇をしたかったんだよね」と言葉に置き換えると、納得して気持ちを調整していきます。幼児は執着しないことが多いので、楽しく遊ぶことができるよう気分を切り替えてあげると早く解決に向かいます。

学びに向かう力を育むための手立て

## 【4歳児 7月の事例】

### あきらめずにやってみようという気持ちをもつ

「セミ、もう1回捕まえない」

① 登園するとすぐ、A児はタモを持って園庭のセミが鳴いている木を見上げた。一生懸命探しているとB児・C児・D児もタモを持って集まってきた。A児が、指を指しながら「あ、あそこ」と言ってもB児・C児・D児は「どこ、どこ」と言ってすぐに見つけられず、B児が「ねえ、どこにいるの」と強い口調で言った。「ここだよ」と、A児がタモを勢いよく突き上げると、セミが飛び立った。

② 4人は、セミを目で追いながら「あああっ」と、長いため息をついた。C児が「まだ、鳴いてるよ」と言うと、A児がまたセミを見つけた。A児は「あそこ、すごく高い所。そうだ。台を持ってこよう」と言って、B児と一緒に走り出した。2人で台を引きずって持って来ると、A児は台の上に乗って、さっきより高い位置でセミを探した。A児が「どこだったっけ」と言うと、C児は「あそこにいるよ、僕ずっと見張ってたから」と言って、A児が乗った不安定な台を押さえて支えた。

保育者が「A君、これで落ちないね」と声を掛けるとC児はうなずいてさらにしっかりと支えようとした。

③ 台の上のA児はタモを伸ばし捕まえようとするが、また逃げられた。みんなは、がっかりした。D児は「セミが気がついて逃げちゃった。」「A君、タモをびゅんってしてたよ、惜しかったよ」と言うと、D児は、A児と同じように素早くタモを振って見せた。それを見てA児が「もう1回捕まえない」と言い、4人はもう一度セミ探しを始めた。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

#### 【興味・関心、好奇心】

①園庭でセミの声を聞いて、見つけて捕まえないという意欲をもった。

#### 【目的の共有、集中力、協力】

②セミを捕まえないという目的を共有して、台を運んだり安定するように押さえたりした。

#### 【粘り強さ】

③残念な気持ちになった4人が、もう一度やってみようという目的をもってセミを探し始めた。

### 学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

## 環境の構成のポイント

「一人一人が身近な自然と触れ合うことができるようにしましょう」

- 4歳児の虫捕りは、タモが長すぎると振り回した時に危険な場合があるので、少し短めのものを用意します。一人1セットのタモと虫かごを用意しておき、4歳児の特徴である「友だちと一緒にうれしい」という気持ちが満喫できるようにして、遊び（虫捕り）に集中できるようにしましょう。
- 園庭には季節に応じて草花や木を植えて、自然環境を豊かにするように心掛けましょう。チョウやバッタ、セミなどの虫が寄ってくるように、花や木の種類にも配慮し、餌になる雑草は抜かないようにします。また、突然、カブトムシ、ザリガニやオタマジャクシなどを持って来る幼児のために、学級用の飼育箱は多めに用意しておき、くみ置きにした水やエサ、昆虫マットなど、予想のできる用具や飼育グッズを季節に応じて用意しておくことも大切です。

## 保育者の関わりのポイント

「安全に配慮して、幼児同士の自発的な行動を見守りましょう」

- 友達と同じように遊びたい気持ちが読み取れた場合、幼児同士の会話で物事が進んでいくように傍らで見守りながら一緒に行動しましょう。
- 長い物の扱いには不慣れな幼児もいるので、安全に遊ぶことができるよう、できるだけ近くにおいて、扱い方を知らせましょう。
- 夢中になって遊ぶため、危険な虫かどうかの判断、帽子の着用、水分補給、休息など、安全や健康に対して、保育者が近くで見守りながら、気を付けていくことが必要です。



## 家庭での関わりのポイント

「幼児の学びの芽生えのチャンスをつぶさないようにしましょう」

- 4歳児は、興味をもつと集中して取り組もうとしたり、失敗しても再チャレンジしたりする姿が見られます。そして、保護者や保育者の言葉よりも友達の言葉に耳を傾けるようになり、時を忘れて没頭して遊びます。このような幼児の自発的な行動が学びの芽生えの基となるので保障していきましょう。
- 好奇心が旺盛になると、小動物や園庭の虫に興味をもつ幼児が出てきます。「虫はちょっと苦手」という方もいるでしょうが、「自分は苦手だから」と正直に伝えながら幼児が自分から求めようとしている姿は、学びの芽生えのチャンスとしてつぶさないように心掛けましょう。

学びに向かう力を育むための手立て

## 【4歳児 1月の事例】

### 初めての短縄跳び、友達の中で自分もやってみようとする

「先生、できたよ」

- ① A児は、戸外へ出て行き縄跳びをしている仲良しのB児の所へ行った。B児は、A児が近づいてきたことに気付かず、縄跳びを片付け始めた。A児が「ええっ、やめちゃうの。やろうと思ったのに…」と言うと、B児が「あっ、じゃあ、やろうかな」と言ったので、A児はB児の隣に行き跳び始めたが、縄を回さずにピョンピョン跳ぶばかりだった。
- ② A児の様子を見た保育者は、A児の近くに立って「まわして・ぴよん、まわして・ぴよん」と言いながらゆっくり縄を回しながら跳んで見せた。A児は、保育者をじっと見ていて、ゆっくりと縄を回したが、うまく跳べなかった。そのうちに、A児は、隣でピョンピョンと跳んでいるB児を見て、表情を曇らせた。保育者が「Aちゃん、がんばれ、そうそう、前に来たら、ぴよん、だよ」と、声を掛けて応援していると、周りで縄跳びをしていたC児・D児・E児が、「先生見て、こっち見て、見て」と、寄って来た。
- ③ 保育者は「ねえねえ、Aちゃんを見て。もうちょっとだよ」と、声を掛けると、B児・C児・D児・E児が、それぞれに自分の縄で「ここにきたら、ぴよんってするんだよ」「こうだよ、こう」と、やって見せながらA児の応援を始めた。A児は真剣な表情になり、引っかけながらも繰り返し練習した。
- ④ 何回も練習しているうちに、やっと、A児が1回跳ぶことができた。それを見ていたE児が「やったやん」と、自分のことのようにジャンプして喜んだ。A児は、ほおっと息を吐いて「先生、できたよ」とにこにこして言いながら保育者のところに走ってきた。保育者は「よく、がんばったね。すごいよ」と言いながらA児を抱きしめ、一緒に喜んだ。A児は、にこっと笑って、再び縄跳びの練習を始めた。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

#### 【興味・関心、好奇心】

①友達が縄跳びをしているのを見て自分もやってみようとした。

#### 【意欲、葛藤】

②あきらめそうになったが、保育者の励ましに支えられて練習を続けた。

#### 【粘り強さ、集中力】

③保育者と周りの友達の応援で、繰り返し縄を跳び続けた。

#### 【満足感】

④何回も練習して縄を跳べたことをA児も友達もうれしい気持ちを感じていた。

### 学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

## 環境の構成のポイント

「友達と近くで自分なりに根気よく取り組むことができるようにしましょう」

- 友達が近くで同じようにしていることが、根気よく取り組むために、とてもよい刺激となります。
- 縄跳びを始めたばかりの幼児は大きく振りかぶって、肩全体を使って回します。前のめりになって跳ぶので、だんだん前へ進む傾向もあります。幼児同士の縄がからみ合わないように広い場所を確保して行いましょう。



## 保育者の関わりのポイント

「やってみようという気持ちをしっかり支えながら楽しい雰囲気にしきましょう」

- 保育者や友達の影響を受けやすい時期なので保育者も縄を持って一緒に加わり、個々の取組の過程を把握して、跳ぶ楽しさが十分に味わえるようにしましょう。
- 二つ以上の動作の協応ができるようになるこの時期には、いろいろなことに挑戦しようという気持ちが芽生えます。ゆっくりと落ち着いて縄を回せるようなリズムで保育者が調子をとって声を掛けると、跳ぶタイミングをつかんでいきます。そして、何回跳べるか挑戦したくなります。保育者は跳び方のコツをアドバイスしたり、個々の目標に応じて跳ぶ数をその場にいる他の幼児と一緒に数えたり、応援したりしながら楽しい雰囲気、根気よく取り組めるようにしましょう。

## 家庭での関わりのポイント

「幼児のチャレンジを応答的な関わりで支えていきましょう」



- 鉄棒、縄跳び、うんてい、ブランコの立ちこぎ、自転車乗り等、幼児はできそうになると、「見てて」とせがみ、何度も繰り返しやってみたくくなります。このような時期には、幼児にしっかり付き合う時間を見つけてあげてください。
- 自分からやってみようとする気持ちを認め、幼児のやる気や意欲をしっかりと支え、励ましながら見届けることが、生涯にわたって主体性、集中力や根気をもつ人になる基礎となります。そして、できたときに一緒に喜び合うことが親子の絆を深め、豊かな感性を育みます。

学びに向かう力を育むための手立て

【5歳児 5月の事例】

身近な生き物に愛着をもち、ふさわしい飼い方を知ろうと取り組む  
「に・ぼ・し。にぼしだって」

① A児は、空き箱に梱包材を敷き詰め、ダンゴムシを入れて仲良しのB児と園庭でしゃがみこんでいた。保育者が「ふかふかなのね」とのぞき込むとA児は満足げな表情になった。保育者が、「土は入れなくていいの」と聞くと、A児は土を入れ、ダンゴムシは湿り気のある土の中に入り込んでいった。A児が「ここが気持ちいいのかな」と言って見ていたが「家に帰ったら逃がすの。ママ、虫嫌いなの」とつぶやいた。その日の降園時、保育者は、母親にA児が虫と関わる中で経験したことや気づいたこと等を伝えた。

② 降園後、園庭でA児と母親が「家で逃がす」「園で逃がそう」と言い合っていたが、「家に持ち帰り1日たったら逃がす」ということに決まった。翌週の朝、母親に尋ねると「翌日逃がしました。今日もダンゴムシを捕まえるんだと箱を持って来ました」と笑顔で話してくれた。

③ その日の午後、A児は、持って来た箱の中に土を深めに入れ、さらにダンゴムシの餌として、ピンクと白の紙を細かく切ってゼリーカップの中に入れ、箱の隅に置いた。保育者が「これ何」と聞くと「ダンゴムシは何でも食べるんだよ」とA児が答えた。保育者が「何かで調べたの」と聞くと「本がないから調べてないよ」とA児が言ったので、保育者は「何を食べるか調べてみようよ」と一緒に保育室へ戻り、数冊の中から“生き物飼う方図鑑”を手渡した。A児は「ダンゴムシ、ダンゴムシ」と言いながら探し、ダンゴムシのページに魚の絵が描いてあるところで目をとめた。「に・ぼ・し。にぼしだって」とA児は言い、白とピンクの紙が入ったゼリーカップを指し「これは、ダンゴムシの家の飾りにしようと思ってたんだ」とつぶやいた。

④ 降園後、A児は、B児と母親と一緒にダンゴムシを囲み「色が薄いのは小さいってことかな」「煮干しを食べるんだよ」「煮干してルル（飼犬）のおやつのおしゃべりが続いた。

翌日、母親は「本当に煮干しを食べるんですか」と半信半疑だったが、A児の話を受け止め煮干しを持たせてくれた。A児とB児は「食べるかどうか見ていようよ」と、ダンゴムシの動きにじっと目を凝らしていた。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

【愛着、好奇心】	【葛藤、折り合い】	【自己主張】	【発見の喜び】 【生命の尊重】	【探究心、集中力】
①自分なりの思いを込めてダンゴムシの家を作り、ダンゴムシの生態に気付いた。	①母親が虫嫌いなので、ダンゴムシを逃がさなければいけない、という気持ちになった。	②もう少し一緒にいたいと思い、「家で逃がす」と言った。	③ダンゴムシの餌が煮干しであることを見つけ、紙は、餌でないこと納得した。	④友達や母親と互いに考えを伝えながら試したり確かめたりした。

学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

学びに向かう力を育むための手立て

環境の構成のポイント



「幼児が必要とするものを用意し、納得できるようにしましょう」

- 同じ生き物に対して一人一人気付くことや関心をもつことは、異なります。友達同士で、興味、関心をもったことを交換し合ったり、名前、生態や飼い方を調べたりすることができるよう図鑑、絵本等を数種類用意しましょう。

保育者の関わりのポイント

「幼児の関心事を受け止め、問いかけて好奇心・探究心を深めましょう」

- 生き物に対する好奇心や探究心、生命を尊重する気持ちは、その対象への愛着が基になります。愛着をもつことでその生き物の生態をよく見ようとしています。5歳児になると、自分本位な飼い方から、その生き物にふさわしい飼い方に気付いて飼育するようになります。生き物への興味を示した機会を捉え、保育者も一緒に生態を観察したり飼育したりすることで、幼児の好奇心や探究心を深めていきましょう。



家庭での関わりのポイント

「一緒に観察したり調べたりして、幼児が不思議に思ったり、気付いたりしたことを大切にしましょう」

- 幼児は園で様々な生き物に出会い、見たり触ったり試したりすることで、好奇心や探究心を膨らませていきます。「虫などを触ったり見たりするのは苦手」という保護者の方もいるでしょうが、幼児の発見することに目を向け、一緒に驚いたり楽しんだりしていきましょう。
- この時期の幼児は「知りたがり屋」という特長があります。大人にとっては、当たり前に分かっていることでも、すぐに正解を教えるのではなく、幼児と一緒に観察したり調べたり、不思議に思ったりしていくことが、幼児に幅広い見方、深い考え方をする土壌を培い、学びに向かおうとする意欲を育みます。



【5歳児 12月の事例】

行事をきっかけにして、遊びの見通しをもって協力して活動する  
「たこ焼き屋さん、いいと思うよ」

- ① お店屋さんごっこの遊びが始まり、どのようなお店にしたいか、クラスで話し合うと、「たこ焼き屋さんがやりたい」というA児の提案に賛同する幼児が多かった。
- ② さっそく必要なものを話し合うと、「たこ焼きはこの紙を丸めて作ろう」「大きさはどれくらいかな」「青のりは折り紙を細かく切って…」「ショウガもいるよ」「鯉節も」「温度は200度くらいってママが言っていたよ」「箸置きもいるね」等、それぞれが思いついたイメージを伝え、確認し合った。
- ③ 「箸置き、僕作っていい」とA児が言うと、「僕はたこ焼き器作る」とB児が引き受けた。「じゃあ、一緒に作ろうぜ」とC児が加わると、「じゃあ、私は鯉節とショウガを作ろっかな」とD児がつぶやき、それぞれが自分の役割を決めた。
- ④ 次の日。たこ焼き屋へ行ってきた幼児が、エプロン、メニュー表などがあったことをみんなに提案したことで、足りないものと考え直すことになった。口々に思いついたことを言うので、保育者が「一度、ちょっとお店をやってみる」と提案し、役に分かれて、試しに売り買いをしてみることになった。実際に、紙を丸め、たこ焼きを作って焼く真似をしていたが、「ソースはどうしよう」「絵具でいいんじゃないかな」「その場で塗ると、ベチャベチャになるし」と困ったことも出てきた。保育者が「どうしたらいいかな」と、言葉を添えて待つと、すぐにD児が「ちょっと待ってて」と、試作品を作り始めた。みんなで話し合って、D児のアイデアに賛同し、たくさんのたこ焼きを作った。
- ⑤ 焼く人、皿に載せる人、店でお金を受け取る人、運ぶ人など、じゃんけんしたり、順番に変わったりして役割が決まった。お客用のテーブルやいすなども用意され、たこ焼き屋を開店し、大盛況だった。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

【意欲】	【話し合い】 【目的の共有】	【振り返り、見通し】	【社会事象への関心】	【協力、充実感】
①みんなで遊びたいという気持ちが高まってお店屋さんをしようという気持ちを一つにした。	②自分なりに考えたことを、みんなに伝えることで、たこ焼き屋のイメージを共有した。	③遊びを進めるために、自分のしたいこととやできそうなことを引き受けた。	④遊びを本物のようを実現して楽しみたいという思いをもった。	⑤それぞれの役割を分担して遊びを進めた。

学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

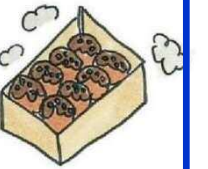
仲間と協調する力

学びに向かう力を育むための手立て

環境の構成のポイント

「幼児が自由に選び活用できるように、イメージに合う材料・素材を整えましょう」

- 5歳児後半になると、以前に経験したことをきっかけにして、共通の目的をもって次の遊びを展開させることに意欲をもつようになります。行事の写真飾る、昨年、年長児が作ったものを手に取ることができるように置く、などの環境を工夫し、経験したことを生かして新たな学びに向かおうとする幼児の発想が実現できるようにしましょう。
- 多様な教材、多様な材料から選ぶことができるようにしたり、多目的に活用できる用具を整えたりして、幼児が自分で考えを巡らせながら遊びに使っていくように準備しましょう。



保育者の関わりのポイント

「幼児の主体性を十分に発揮して遊びが実現できるようにしましょう」



- この時期は、友達と一緒に共通の目的やイメージをもって遊ぶことに楽しさを感じる時期です。目的やイメージの共有には、幼児たちが自由に考え、遊びの中でやり取りが十分にできるゆとりのある生活の流れが欠かせません。
- 保育者が、介入する言動を控えめにするに心掛け、幼児の発想を十分に引き出して遊びが楽しくなるようにしましょう。

家庭での関わりのポイント

「自分の目で見て、周りの様々なことに興味をもつことができるような体験を大切にしましょう」

- 園での出来事や、自分の思いや考えが話せるようなひとときをもつことで、よい聞き手になり、幼児の興味・関心を共有しましょう。
- 家庭での経験を園生活で伝え合うことから遊びが発展し、深い学びへとつながっていきます。お手伝いの機会を与えたり、会話しながらショッピングをしたりするなど、社会の様子にも目を向ける機会を設け、豊かな生活が経験できるように心掛けましょう。





## 【5歳児 1月の事例】

### 話し合って折り合いをつけて遊び、仲間と楽しさを共感する 「分かった。じゃあ、ぼくとB君分かれよう」

- ① 登園してきたA児とB児は、すぐに園庭に飛び出しボールを手にして、「みんな来るから大きくしよう」と言って、「1・2・3・・・」とドッジボールのコートを歩幅で測り、棒で線を描いた。次々と幼児たちが集まり、「僕、青チーム」「私緑色チーム」と分かれ、A児とB児は青チームに並んだ。
- ② A児とB児は、いつも一緒にチームで勝つことが続いているので、周りの幼児からは「A君とB君、強いもん」「ずるい」という声があがった。C児が「A君たちが勝つに決まってる」と言う、「そうだよ」「強いよね」「ずるい」「青チームがいいな」などと他児も言い始めたので、保育者は傍らに行き幼児たちの話を聞いていた。
- ③ A児が「C君だって投げるのうまいじゃん」、B児が「そうだよ。ぼく当たったことある」と言う、C児は、「うん。当てたことあるけど、A君のボールすごく強いからとれないんだ」と言った。D児も「そうそう。超スピードあるし」、E児も「すごく速いよね」と言う、A児は困ったような表情になった。
- ④ すると、F児が「昨日、僕とったよ」とボールを抱えたポーズでうれしそうに言った。A児に憧れているF児は、昨日のことがとてもうれしかったようだ。保育者が「すごいねF君、とったんだ」と言う、A児も「そうそう、F君にとられちゃった」と言いながら少し表情が柔らかくなった。G児が「私は、いつも逃げちゃう」と言う、A児が「Gちゃん、逃げるのうまいから当たらないんだよ」と言った。すると、G児が「Hちゃんもうまいよね」と言う、H児が「ピュって逃げちゃうもん」と笑いながら言って和やかな雰囲気になった。
- ⑤ A児が「分かった。じゃあ、僕とB君分かれよう」と言う、B児も「いいよ」と言って、A児とB児が分かれてチーム作りをした。
- ⑥ ドッジボールは大接戦になり「面白かった」と、A児もB児もチームの仲間とハイタッチをして喜び合った。



幼児の姿から『学びに向かう力』を読み取ると…

【目的の共有】 【数や形への関心】	【言葉による表現】	【葛藤】	【相手の気持ちの 受容】	【折り合い】	【充実感】
①ドッジボールをしようと登園し、自分たちで歩幅を数えてコートを描いた。	②A児たちへの不満を言葉で表した。	③一人一人の話を聞いたり返したりしながら自分の思いと向き合った。	④互いの力やその子らしさを認めながら話した。	⑤友達や保育者の話を聞いて、B児と分かれようと思ひ提案した。	⑥自分のチームの仲間と力を合わせて遊び、「面白かった」と満足した。

### 学びに向かう力

自分の気持ちを調整する力

粘り強く  
取り組んだり  
挑戦したりする力

仲間と協調する力

## 学びに向かう力を育むための手立て

### 環境の構成のポイント

「自分たちで遊びの環境を整え、楽しめるようにしましょう」

- 5歳児後半になると、仲間と共通の目的をもって遊びや生活をしようとし、自分たちで環境を整えるようになります。ドッジボールのライン引きなども、保育者が幼児と一緒に形や広さを考え、描き方を見せていくと、次第に自分たちで行うようになります。
- 遊びによっては大きな遊具や用具を扱うこともあるので、安全に留意して使えるようにしておきます。
- 幼児たちが分かり合って遊びに取り組むことができるように、話し合いの時間を確保します。

### 保育者の関わりのポイント

「話し合いながら葛藤や気持ちの調整をする経験ができるようにしましょう」

- 5歳児後半になると、幼児はその子らしさを発揮するようになり、互いにその姿をよく見ています。その姿を受け止め憧れながらも、時には「ずるい」「勝てない」などと言って、悔しさやいら立ちの気持ちを表します。
- 保育者が、善悪という判断をするのではなく、幼児が自分の思いを出しながら話し合う中で、葛藤したり自分と向き合ったりする経験を得られるようにします。相手の話を聞くこと、話を聞いて自分はどうか考えること、そして考えたことを相手に伝えること、このような話し合いの経験を生活や遊びの中ですることが大切です。



### 家庭での関わりのポイント

「幼児が自分の気持ちを素直に出して話せるように、しっかりと耳を傾けましょう」

- 5歳児後半になると、いろいろなことに挑戦し、意欲的に取り組むようになります。その中で、自分の力を知ったり友達と比べたりして、自分と向き合うようになります。その時の友達への不満や自分の考えなど幼児の素直な気持ちを共感しながら聞いてください。
- 幼児は自分の考えや頑張りが認められることで、相手の思いを受け入れたり認めたりしながら、自分の気持ちをコントロールする力が育っていきます。
- 幼児が素直に思いを出せるよう、単に「良い」「悪い」という判断は、避けましょう。